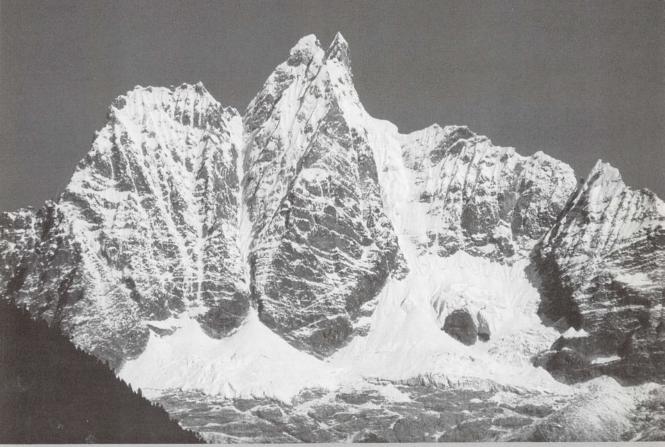
E75† No.366



2002 MAY



日本ヒマラヤ協会

THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

平成14年度通常会員総会のお知らせ!!

日本ヒマラヤ協会平成14年度通常会員総会を下 記により開催いたします。

ご承知のように、総会は本会の最高意思決定機 関でありますので、会員の皆様には万障繰り合せ のうえ出席くださるようにお願いいたします。

なお、やむを得ず欠席される場合は、定款の定めるところにより、委任状を必ず提出されるようお願いいたします。(委任状は、添付いたしました料金受取人払はがきをご利用ください。) 5月12日までに必着するようお願いいたします。

記

- 1. 日時 平成14年5月18日(土)午後1時~2時
- 2. 場所 東京都豊島区東池袋 4-7-7 かんぽヘルスプラザ東京

2 03-5952-6881

JR池袋駅東口から徒歩8分 地下鉄有楽町線東池袋(出口A2) から徒歩2分 3. 議事

- (1) 議案第1号 平成13年度事業報告について
- (2) 議案第2号 平成13年度収支決算について
- (3) 議案第3号 平成14年度事業計画について
- (4) 議案第4号 平成14年度収支予算について
- (5) 議案第5号 役員の改選について
- 4. その他

HAJ創立35周年記念行事予告

HAJは、1967年10月1日の創立から本年10月で満35周年を迎えます。これを記念して下記のとおり記念行事を予定しています。詳細は決定次第機関誌々上にてご案内致します。

記

 日時:2002年9月28日(土) 午後~記念講演会[ヒマラヤ登山50年] 夜間~記念祝賀会

表紙写真

「チベットのアルプス」念青唐古拉山脈東部、東チベットの景勝地、八松 措(湖)の北側に屹立する奇峰サマラサ6132メートル。2001年10月23日撮影。 (中村 保)

ヒマラヤ No.366

1. PEOPLE

Kurt Diemberger

2. 未踏の念青唐古拉山脈東部を探る(2)

中村 保

- 19. **ヒマラヤ・ニュース**〈地域ニュース・Books〉
- 20. 第23回インド・ヒマラヤ会議報告
- 24. 寸感•事務局日誌

PEOPLE -

第40回を迎えた日本山岳協会主催の「海外登山 技術研究会」のゲスト・スピーカーとして来日し た。彼のことは今更紹介するまでもなく、もはや 伝説上のヒマラヤニストといえよう。しかし、R. メスナーすら知らない世代が増えた若い読者のた めには概要の紹介も必要だろう。

1932年3月10日、オーストリアのフィラックで生まれた。52年に初めてマッターホルンに登頂。56年にはその北壁を1日で登攀。57年はハイ・ポーターも使わずたった4人(ヘルマン・ブールに誘われて)でブロード・ピーク主峰(8,051 m)初登頂。58年アイガー北壁登攀。60年ダウラギリ主峰(8,167 m)に初登頂し、八千メートル峰2座初登頂の記録保持者となった。これは、ヘルマン・ブール(53年ナンガ・パルバット、57年ブロード・ピーク主峰。ブロード・ピーク終了後にディームベルガーと2人で行ったチョゴリザで遭難死。)に次ぐ記録である。

[ちなみに、人類初の八千メートル峰2座登頂者は、シェルパのギャルツェン・ノルブで(55年マカルー、56年マナスル。61年大阪市立大学隊のランタン・リルンで遭難死。)ある。]

78春マカルー $(8,463 \,\mathrm{m})$ 登頂。秋にはサガルマータを南東稜の $8,200 \,\mathrm{m}$ からスキー滑降したフランスのニコラ・ジャジェールらと登頂。79年ガッシャーブルム Π $(8,035 \,\mathrm{m})$ 登頂。そして、84年には、27年振り2度目となるブロード・ピーク登頂を、その後、K2で遭難死するジュリー・ティリスと成し遂げた。この時、ディームベルガー52歳。

そして運命の86年夏。後に「ブラック・サマー」と名付けられたK2の悲劇に彼もまたティリスと組んで登場する。その詳細は邦訳「K2嵐の夏」(ご本人はこの邦題については不満らしく、岳人誌上で[あまりよくない、『夢と運命』がよい]と語っている)を読んでもらいたいが、ティリスは死亡し、彼は生還したのであった。

そもそもディーム・ベルガーとティリスの結び 付きは、彼が彼女に惚れたようで、多少のいきさ つを経て、82年から二人で[世界最高所映画撮影



班」を組みナンガ・パルバットやチョゴリ、K2 などを舞台に作品を制作している。

カラコルムの北側、シャクスガムには82年以来7回通い、その魅力にとりつかれている。暫くはその奥地通いが続きそうである。また、マカルーのチベット側からネパール側へと一周する巡礼ルートを辿るのが残された目標である、とも語った。

今回の講演の中で際立っていたのは「K2」に対する異常とも思える過剰反応である。そのことは「エヴェレストの登頂者は29人に一人、K2は7人に一人が死亡している」ことを引き合いに出して、「K2は誰にだって薦める、という訳にはいかない!」と言い切ってしまっていることでも分る。確かにK2が困難な山であることは、多くの登山家に知られていることではあるが、ここまで言われるとちょっと異常と感じざるを得なかった。これは私だけの感想だろうか?

歓迎会の席で、「お父さんも登山家だったのですか?」と聞くと、「山はあまり登らなかったが、 君のようにヒマラヤの情報を集めて皆に紹介していてその方面では有名だったよ」と笑った。

(記:山森欣一)

- 未踏の念青唐古拉山脈東部を探る(2)ー

2001年10-11月

中村 保

■錯高から北の谷へ

結巴は工布江達県錯高郷結巴村、郷政府のある中心の村で、八松措の周囲では一番大きい。車道はここまでである。村の中心にレストランを兼ねた集会所と招待所がある。売店もあり日用品は揃っている。集会所と前の広場は村の社交場にもなっていて、村人がビデオを見に集まる。公衆便所もある。ただ、広場への入り口付近は道路がゴミで埋まっている。ここだけではないが、奥地のチベット族には外のゴミを片付ける習慣はないようだ。交易路の野営地でもゴミが散乱している。折に触れて苦言を呈するが効果はない。

我々は招待所に泊まる。ガイドと運転手は荷物と一緒に一般用の宿舎、日本人は管理人の家の一室を借りる。ストーブのある居間があるのでこちらの方が快適である。管理人は好感の持てる知識欲旺盛なチベット族で、気持ちよく世話してくれるのが嬉しい。小学生の子供たちは人懐こく、奥さんも感じがいい。温かい家庭である。夜は村長(43歳)さんを夕食に招待する。情報収集と馬を調達するのに欠かせないいつものやり方である。馬の手配は話がまとまり、キャラバンは24日出発が決まる。ここのレストランも料理人は四川省からの出稼ぎである。豚と木くらげの炒めはなかな



▲八松措(湖)と島にある僧院

か美味い。道路工事の漢族の出稼ぎたちが宴会を している。ここだけではなく、工事関係の作業員 は出稼ぎの漢族である。以下は村長さんの話であ る

- (1) 結巴村は73戸、人口446人、すべてチベット族である。
- (2) 産業はチンコー麦(大麦)・りんご・桃の 栽培、豚の飼育、松茸その他の茸の収穫。 現在チンコー麦の種を蒔いている。
- (3) 今年の9月に二人の欧米人が奥の村に入った。2000年秋の長野隊のことは知らない。
- (4)子供は多い。多吉さん自身男女4人づつ8 人の子持ちである。

工布江達地方のチベット族は独特の帽子を被っている。男のは全周上に丸く反った鍔があり、鍔と付根の部分に刺繍がしてある。女のは回教徒やユダヤ教徒が被る鍔のない帽子に似ていて刺繍がしてある。チベット全体では細かく分けると162種類の帽子があるという。誰から聞くともなく、この地方特有の「毒殺」の話になった。信じ難いが誰も否定しない。キャラバンの途中の紀行で追々書こう。

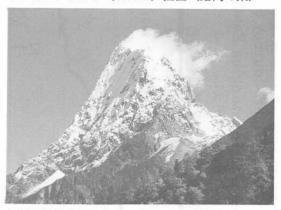
10月24日、曇。8:30 7℃。予定通り馬8頭、馬方4人がくる。男三人、女一人。結巴を9時に出発する。湖岸の針葉樹林帯のプロムナードを行く。おとなしい馬なので快適である。昼頃、八松措北端の錯高村に着く。ここも大きな村である。ウォードが書いている大きな祈祷の旗が今も村外れに立っている。錯高から北の谷に入る。生憎雲が低く両岸の6000m峰は見えない。

道はよい。 5 時過ぎにツォンバ村着。チベット 族の民家に泊めてもらう交渉をガイドにさせるが、 馬方の親戚の村長がいないので決められないと埒 のあかないことを言う。テントを張るのは面倒な ので、ガイドの尻をたたいて再度交渉させ、300 元払ってようやく小学校の集会所に泊めてもらっ た。

この村は25戸、人口125人。チンコー麦の栽培 とヤクに飼育だけが生業である。こんな奥地にも ラサから行商人がきて衣類を売っている。ナイキ やミズノのブランド品もある。夕食に村長が来て くれたが、我々の食べ物には手をつけない。毒を 怖れてかもしれないと張少宏が言う。客人を毒殺 する習慣があると伝えらるこの地方らしい。毒を 入れられるのを警戒して、我々の飲料水はガイド が自分で直接川から汲んできた水だけを使う。焚 かれる香にも毒が仕込まれているかも知れない。 人をたくさん殺すほど神に近づける、あるいは殺 した人の幸運が自分に乗り移る、したがって金持 ちや運勢のよい人が狙われると信じられてきた。 アルプスのような牧歌的な放牧地の風景には似っ かわしくないが、作り話ではなさそうである。夜 は寝入りばなに馬方の一人が読経を始めたのには 閉口した。これが毎晩つづいた。

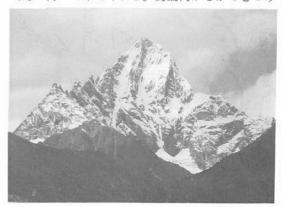
10月25日、曇後晴。9:00 2℃。9時20分出発。 谷はツォンバの少し北で山につきあたり東西に分 かれる。西に向かうのが本谷である。我々は本流 の左岸を行く。合流点を過ぎたあたりで右岸の無 名峰5930mの北面に懸かっていた雲が薄布が剥が れるように消えて、頭上に美しい氷雪の襞が朝陽 に眩しく輝く。背に柔らかい日差しを受けてのん びりとキャラバンを楽しむ。娘さんたちがから竿 を振って脱穀の作業をしている。昔の日本にもあっ た長閑な風物詩である。扎拉村を通過し村はずれ で昼食の時、突然二頭の馬が荷を背負ったまま疾 駆して逃走する。幸い放り出された荷物を見つけ ることができたし、一時間ほどで馬方が連れ戻し てきた。両岸の谷の奥に6000mを超えるピークが 次々に姿を現わす。振りかえるとツォンバ村の背 後に屹立する二つの6000m峰とその間の氷河がが せり上がるように全貌を見せる。午後5時、無人 の放牧小屋に落ちつく。ラマヤルンという地名で 海抜3610m。ここを活動のベースにする。山裾は 樹林帯なので燃料の薪は豊富にあるのが有難い。 10月26日、快晴。8:20 -2℃。6500mを超え るピークが集まる谷の源頭の氷河を目指す。広い 谷が終わり峡谷帯に入ると倒木に遮られる悪路と

▼ジェシナラガブ (6316m) 西面 (錯高の東)

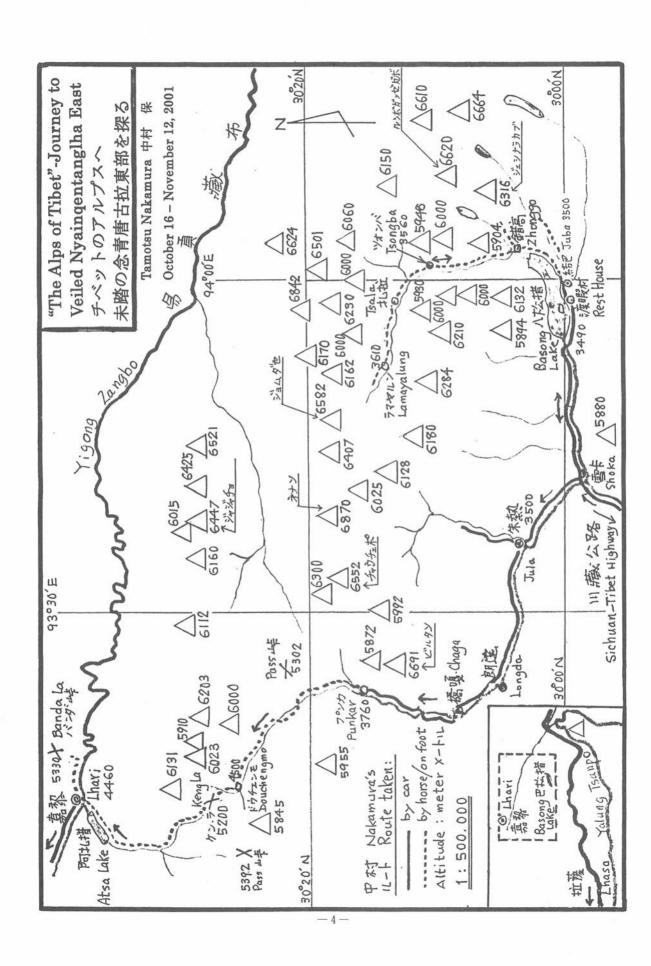


なり馬は進めなくなる。11時、踏み跡をたよりに 歩き始め一時間ほど登るが、氷河までは容易では ないことがハッキリしてきたので、午後1時に引 き返す。雲が広がり冷たい風が吹き降ろす。快晴 の日でも午後になると雲がでる。午後4時無人小 屋に戻る。夜半に雨が降るがすぐ止む。

10月27日、曇後晴。 9:00 4 \mathbb{C} 。昨日の午後雲が出て写真を撮れなかった源頭に近い左岸のジョムダゼ、6582mを撮影するため、張少宏と暗いうちに出発する。晴れてくると気温が下がってくる。ラマヤルン北側の6000mクラスの岩と氷の城砦も印象的である。それぞれが個性のある山である。正午に無人小屋帰着、帰途につく。馬方たちは嬉しそうである。まだ僅か四日間だが長旅には慣れていないらしい。彼らは、駆引きは強いが、ある所からは金を積んでも行かなくなる。NZ隊もポーターが帰ってしまい苦労している。キャラバンを計画する際に留意すべきことである。午後 4 時にツォンバにて小休止、村から娘さんがバター茶を馬方に持って来てくれる。勿論何がしかの心づけ



▲無名峰(5844m)南面(結巴より望む)



は渡している。毒のことが怖いので我々は手をつけない。この日は、2時間ほど行きメッモ村止まりとする。ここでも我々は歓迎されざる来訪者のようで、民家には泊めてもらえず、300元払ってようやく穀物小屋を貸してもらった。四川省のカム地方では総じてカンバ(カム地方のチベット族)は自分の家に快く受け入れてくれたが、おなじチベット族でも地方によって変わる。

10月8日、快晴。8:30 -3℃。谷の右岸の60 00m無名峰が鮮やかなモルゲンロートに映える。9時半出発。寒いのでしばらく歩いてから馬に乗る。振り返ると、今まで見えなかった純白のピラミッドが我々を見送ってくれる。昼まえに錯高村に着く。時間があるのでNZ隊が入った東の谷の氷河湖を偵察に出かける。村の娘さんを案内に雇い1時間半ぐらい左岸沿いの道を歩いて上るが、展望が開ける目途が立たないので引き返す。夕方6時に結巴の招待所に帰着して、第一段階の旅をスムーズに無事終了する。誰も落馬しなかったことを祝う。食堂兼集会所は夜遅くまでカラオケとビデオ・テレビで賑わっている。

■毒殺の谷、そして「幸運の岩」

結巴の招待所の管理人、勉強家でインテリの格 桑多吉さんに毒殺の話しを聞く。彼の説明を要約 する。

- (1) 歴史的には、那曲から工布江達に通じる交易路は塩の道だった。商人が狙われた。
- (2) 理由は、殺してその人の運を自分のものに するためである。
- (3) 今日でもその習慣は残っている。最近ではカンバの商人の弟が毒殺された。
- (4) 民家で出されたものに口をつけないこと。 例えば、バター茶を差し出す時、毒を爪の 間につけ、気付かれないように茶のなかに 溶かし入れる。微量でも利く。
- (5) 毒の効果が現れるのは半年後、一年後のこともある。
- (6)(我々の旅の第二段階)朱熱郷から先はよ り危険なので、水も食べ物もすべて自前で 用意すべきだ。
- (7) 毒殺の対象は人間だけではない。他人の動物も殺す。毒殺すれば、そのヤクや馬のもっ

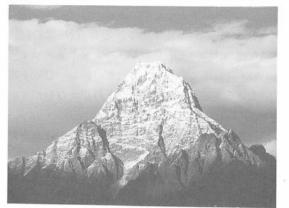
ている運や優れた資質が自分のヤクや馬に 乗り移ると信じている。

根拠ない風習ではないのだろう。NZ隊の記述にも書かれている。しかし、キングドン・ウォードの本にはでてこない。あれだけ細かい観察を書いているウォードが見逃したとは思えないので、半信半疑にならざるをえない。

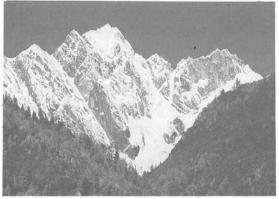
10月29日、曇後晴。9:00 6.5℃。9時過ぎに パジェロと結巴でハイヤーしたおんぼろ北京ジー プで出発。八松措の措宗根巴を訪れてから第二段 階の起点である朱熱に移動する。次々にハプニン グが始まる。まずジープがパンクする。道を間違 える。工事のため道路が封鎖されている。が、さ して大事にはならず、せいぜい二時間ぐらいの遅 れで済む。雪卡で北西に向かう朱熱への道に入る。 たいして悪路ではない。午後3時まえに朱熱郷の 新しい中心の村に着く。三階建ての郷政府のオフィ スを建設中である。招待所を確保するのに時間が かかる。何かの事件の調停のために工布江達から 来ている公安に尋問される。歓迎してくれる雰囲 気は感じられない。第二段階の嘉黎までのキャラ バン・ルートに関する情報集めと必要な段取りは 夕食のときに郷政府の役人に頼むとして、小高い 丘の上にあるドゥラ・ゴンパ (キングドン・ウォー ドのドゥルクラ僧院) に出かける。ウォードが訪 れたゴンパの廃墟の跡に新しく建てられた僧院が ある。現在10人のラマがお勤めをしている。南東 に八松措南側の5880mの雪峰、ゴンヅデモが見え る。1924年にウォードがきた頃でもこの僧院は衰 退しつつあった。かって800人ものラマ僧がいた 重要な僧院だったが、ポバ族との戦いや、中国 (清朝) との紛争のために、僧の数は130人まで減っ てしまった、とウォードは書いている。

夕食に郷政府役人を招待する。ここにも小屋がけの四川料理の食堂が七月にできた。四川人の進出は留まるところを知らない。役人は三十半ばのチベット族の美人、エリート役人で3年前にラサから派遣された。快活でよく喋る女性である。朱熱郷の総人口は2,031人、15の村と35の放牧地を管理していると言う。子連れで食べにきているチベット族の若夫婦を指差して、初めてお金を使える娯楽の場所が朱熱にできたと喜んでいる。また、

▼アミツォミジモ (5904m) 南面 (結巴より)



▼無名峰(6000m)東面(メツモの西)



▼無名峰(6000m)西面(ツォンバの東)



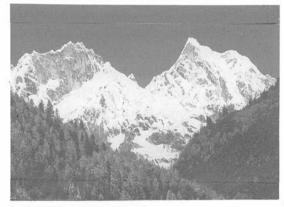
▼無名峰(6230m)南面(扎拉村の北)



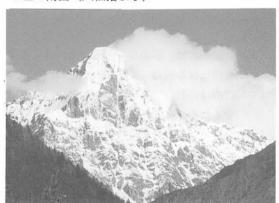
▼無名峰(5948m)西面(ツォンバの東)



▼左に続く無名峰(6000m)東面



▼左の南面 (八松措より)



▼無名峰(5930m)北面(扎拉村の南)



●ジョムダゼ(六五八二メートル)



▲無名峰 (6210m) 北面 (扎拉の南)



▲無名峰(6248m) 北面(ラマヤルンの南)



▲無名峰(6162m)南面(ラマヤルンの北)



▲無名峰 (6150 m) 西面 (ツォンパの東)



▲無名峰 (6230 m) 西面 (ラマヤルンの北)



▲無名峰 (6180 m) 北面 (ラマヤルンの南)

▼無名峰(6025m)南面(朱熱の北)



毒殺の習慣について真顔で話し、嘉黎へ行く途中、 このルートは危険なので気をつけるようにと忠告 してくれる。キャラバンについての彼女の情報と アドバイスは次の通り。

- (1) 自動車道路は嘉黎への交易路のプンカまで と、北の谷のかなり奥までできている。
- (2) 車が通る道では馬による輸送はしない。したがって、朱熱では馬の手配はできない。
- (3) 朱熱からプンカまでの約40kmの道路の後半 は極端な悪路である。6-7時間かかる。
- (4)最後の村、プンカから嘉黎までは、工布江 達県と嘉黎県の県境の峠(ケン・ラ、5200 m)を越える。馬で急げば二日で行ける。 道はよいし隊商の往来もある。キャラバン の準備はプンカでできる。

彼女の説明は正しかった。なを、彼女の旦那も 朱熱郷政府の役人である。

10月30日、曇時々晴。8:00 4℃。高度計は35 00mを指している。今日は春日井さんが下山する日である。9時過ぎにパジェロで出発する。永井さんと私は北の谷へ山群最高峰のネナン、6870mの偵察に向かう。地図の上では南面の氷河の下に湖がある。車道の終点から3時間ほど歩いて登ると湖が見えるという。その近くまで行くために北京ジープをハイヤーする。運転手はチベット族の感じの良い青年で、自分の車で輸送のビジネスをしている。ただし、車はひどくガタがきている。プンカまで二回に分けての輸送も依頼する。

9時半に朱熱を出発、広い谷を北に木材運搬用 の轍を辿って進む。左手の鋸状の岩山が面白い。 清流にかかる中国独特の片持ち橋(カンチレバー 橋)と袂の村落は東チベット的なただずまいである。景色を楽しむまもなく1時間ほど行ったところ、谷が狭まる少し手前で事故が起る。坂道の登りで、大きな岩の上にジープが乗り上げ動かなくなる。ちょうど小さな氷山のように道の真中に岩が20cmほと頭を出してた。迂回できないことはなかったが後の祭りである。「辺境ではいつ何が起こってもおかしくない。が、必ず何とかなる」と自分に言い聞かせる。しかし、なんど発進あるいは後退しようとしても岩から離れられない。しまいにはエンジンが始動しなくなった。トラックなら問題ないところだが、ジープでは無理だった。万事休すである。仕方なしに我々は計画を中止、歩いて朱熱に帰ることにする。運転手は車を放置して牽引車を探しに戻る。

結果としては、ジープが岩に乗り上げたことが 幸いした。歩き出して1時間ほどすると、大型ト ラックがジープを曳いてやってくる。近くにこの トラックがいたことがまず運がよかった。我々も トラックに便乗させてもらう。渡りに舟と、明日 のプンカまでの輸送をトラックの運転手に頼み、 引き受けてもらう。このトラックとの巡り合わせ がまさに幸運であった。ジープの運転手はプンカ に行ったことはない。プンカへの道はジープやパ ジェロでは絶対無理である。それほどの悪路であ る。もしジープで行ったら途中で立ち往生し、計 画に大いに齟齬をきたしたこと必定である。その 意味で、あえて「幸運の岩」と命名したい。トラッ クの運転手は58歳、二十数年山の中で木材輸送に 携わってきたタフなドライバーである。何事にも 動じない、それでいて優しそうな実にいい表情を



▲無名峰(6182m)南面(朱熱の北)

▼ビルタン(6691m)西面(プンカの東南)

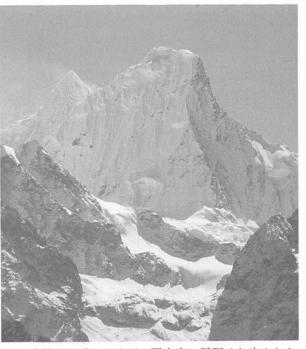
している。彼の娘さんはドイツ人のボーイ・フレンドとラッサで暮らしている。彼女はガイドをし、彼は基金関係のNGOの仕事をしている。一年前に二人で朱熱から嘉黎に行っている。

午後、最高峰ネナンの写真を撮りに谷の東側、 対岸の村まで出かける。夕方までねばったお蔭で 一瞬雲間に現れた頂上を捉えることができた。貴 重な一枚となった。

10月31日、晴後曇後小雪。 8:00-2 \mathbb{C} 。 11時 に朱熱出発。永井さんと私はトラックの助手席に、張少宏とガイドの玉拉は荷物と一緒に荷台に乗る。嘉黎への第一歩を踏み出す。道は西に向かう本谷の左岸を行く。大少の村がある間隔で点在している。比較的人口の多い開けた谷である。八松措の谷より奥が深い。午後2時半、橋屯に着く。公安の車がある。事件の処理・調停のために来たらしい。カンバの商人が高利で土地の人に金を貸したが、返せなくなった。どちらかが訴えたので公安が乗りだしたらしい。

橋嘎までは道路は比較的よかったが、ここから 先は大型トラックが威力を発揮する大変な悪路で ある。道案内をトラックに乗せる。村の外れで、 案内人のリードでいきなり川を渡る。タイヤが水 没する水深である。緊張する。道は北に向かう渓 谷の右岸の樹林帯に沿っている。時々見失うほど はっきりしないところがある。木を薙ぎ倒し、道 無き道を強引に戦車の如く進む。揺れかたも尋常 ではない。ヤクのキャラバンとすれ違う。いつし か小雪が舞い始め急に冷え込んでくる。もう一度 川を横切る。川の中でエンコしないことを祈る。 こんな経験は初めてだ。さすがに荷台の二人はプ ンカに着いたときは青ざめていた。午後5時、プ ンカ (3760m) 着、運転手が選んでくれたチベッ ト族の家に落ちつく。悪路との格闘の後で、着い た時は皆放心状態だった。キングドン・ウォード は朱熱からプンカまで徒歩で二日かかっている。

家族で温かく迎えてくれる。二階の広い台所兼 居間のストーブを囲み人心地が戻る。ガイドの玉 拉はよほどこたえたようで、ぐったりしている。 ここの家の人たちは表情が優しく、親切そうであ る。錯高の谷のチベット族とは印象が違うと、張 少宏がしきりに感心する。私もそう思う。毒殺の



危険など嘘のようだ。張少宏に目配せし出されたバター茶を平気で飲む。馬の手配を主に依頼する。驚いたことに電灯が点いた。ソーラー・バッテリーがここまで普及している。携帯電話と同じで、ポータブルなので普及しやすいだろう。自転車もある。夜は毛布を貸してくれたので暖かく眠れる。気配りがうれしい。夫婦とも良い顔をしている。ガイドの玉拉は疲れがひどく、夕食の後片付けもしないで先に寝てしまう。

ここで玉拉のことを書いておこう。まだ19歳、ラサのシティー・ボーイである。両親ともチベット族で母親はカンバである。ラサ大学付属の英語学校で英語を学びガイドになった。チョモランマやチョー・オユーのBCやカイラスには行っているが、辺境の山旅は初めてである。知識も体力もガッツも乏しい。料理も全く出来ない。ジャガイモの皮の剥きかたも知らない。若いのに物忘れがひどい。チベット語の通訳をするだけである。それでも旅遊局に認定されている公式のガイドである。が、従順で素直なのは取り柄で、経験を積んでよいガイドになることを期待しよう。父親は西蔵自治区政府安全庁の主任をしている。不穏分子を取締る体制側の幹部である。そんな関係を配慮して旅行社が彼を選んだのだろう。玉拉のガイド

▼無名峰(6300 m) 南面(プンカより望む)



▼無名峰 (6203 m) 西面 (ケン・ラより望む)



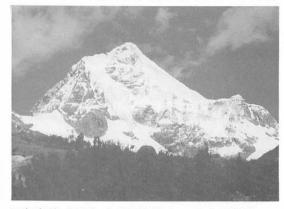
▼無名峰(5955m)西面(ケン・ラより望む)



▼チンガロンパ(5872m)西面(プンカの東)



▼カンガリュー(6000m) 南面(ドゥチェンモの東)



▼無名峰(6131m)南面(ケン・ラより望む)

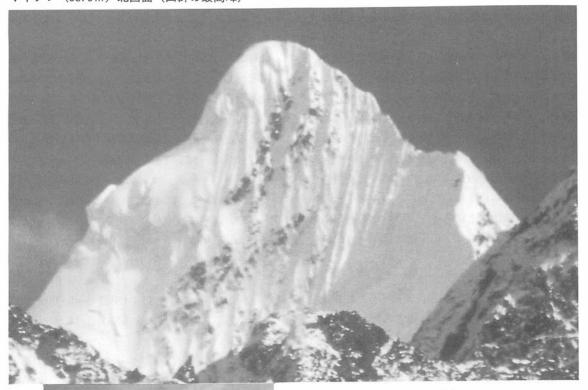


▼左の北面 (プンカの西)

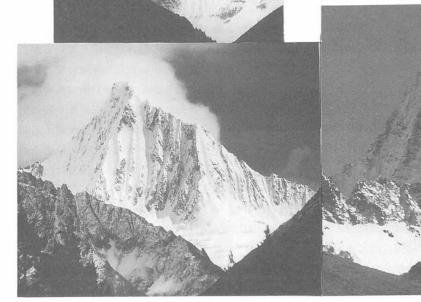


▼ダクンゴ (5845 m) 北面 (ケン・ラより望む)





▲ネナンの南面 (朱熱より望む)



▲チャウチェポ (6552m) 西面 (プンカより望む)

▲ジャジャチョ (6447 m) 西面 (バンダ・ラ途中)

としての報酬は、ラサでの観光では50元/日、トレッキングは100元/日(客は300元を旅遊局に支払う規則になっている)である。1年の内4ヶ月働く、そのうち1ヶ月がトレッキングだと言う。とすると平均月収は750元、英語が多少できるという技能を考慮するとまあまあのところか。

■ハイライトー分水嶺ケン・ラ越え

11月1日、曇時々晴後雪、そしてまた晴れる、目まぐるしい天気。9:00-2 \mathbb{C} 。キャラバンの準備と情報収集、近辺の探訪のため一日を費やす。張少宏と私は写真を撮るために谷の左岸を登る。永井さんは断崖の上にあるプンカ・ゴンパの廃墟を見に出かける。ガイドの玉拉にはプンカ村のことを聞かせた。

プンカは34家族、230人の村落である。我々が 泊まった家のチベット族一家は子沢山である。主 のシャル・ドジさんは53歳、奥さんは47歳、五人 の息子と二人の娘がいる。主の兄は他所の村にい る。農業はチンコウ麦のみ、家畜はヤク7頭、馬 5頭、山羊5頭、羊3頭、牛9頭、豚10匹を持っ ている。プンカ周辺の降雪は多くない。12月から 1月にかけて積っても50cm程度である。キングド ン・ウォードの同行者、コーダー卿はプンカで病 人の治療を施しいたく感謝されている。我々も医 者ではないが薬を提供し、奥さんの歯痛の薬をラ サから取り寄せてあげることを約束したことが、 キャラバンで問題を起こさせない歯止めになった。

この地方は乾燥が進んでいるらしく、刺のある 低木が多い。写真を撮るために動きまわるのに妨 げになり難儀する。プンカは子供の多い村である。 小学校の近くを通ったら50人ぐらいの子供が一斉 に集まってきた。屈託がない。争って写真をとっ てもらいたがる。外国人が殆ど来ないこの村の子 供たちにとっては、我々の来訪は一つの事件なの だろう。

私は標高4000mまで登り東側の山の写真を撮った。幸いチェウチョポと呼ばれている6552mの秀峰を記録に残せた。プンカで渓谷は二つに分かれる。北西が交易路のある本谷で嘉黎に通じる。東の谷の源頭に氷河を取り巻く雪峰の一つがチェウチョポであり、最高峰のネナンへと続く山群の核心部である。湖もある。探査の価値はある。プン

カの東南には6691mの巨大な氷の城砦、ビルタソ とその北に5872mのチンガロンパと呼ばれる山が あるが、プンカからは頂上は見えない。

11月 2 日、曇後快晴。 8:00 -2%。 雲低く底冷えがしたが、すぐ晴れ上がる。10時にプンカ出発。嘉黎まで余裕をみて 4 日の日程とする。馬 6 頭、馬方 4 名で先発し、後から馬 2 頭、馬方 1 名がくる。馬を追加したのは、体力のないガイドの玉拉にへばられては困るので彼を乗せるためである。馬方のリーダーはシャル・ドジさんが勤める。その長男もくる。二十歳ぐらいの青年でひょうきん者で、嘉黎に行ったらデイスコで踊りたいとウキウキしている。

キャラバンの実費を紹介しておこう。帰路の分 として3日加算する。

馬:100元/日×8頭×7日 =5,600元 馬方:100元/日×5名×7日=3,500元 合計: 9.100元

この単価は第一段階のキャラバンと同じである。トラックの運転手には1,200元払った。

北西への本谷はプンカからゴルジュ帯になる。 道はこれを迂回し、渓谷の樹林帯を左岸沿いに辿 る。プンカから嘉黎へ材木を運搬するヤクの隊商 とすれ違う。五体投地のグループも下りてくる。 やがて開けた谷となる。背中に陽光をうけて暖ま り馬上でうとうとするほど心地よい。左手の懸谷 の奥に無名の5955m峰が純白の姿を現わす。南東 を振り返るとビルタソとチンガロンパがよく見え る。谷の左右から多くの懸谷が合流しているが、 源頭は見えない。馬方がいきなり革靴のまま川を 徒渉する。何回か繰りかえす。深い所は馬の腹ぐ らいまである。馬方は水に濡れることを一向に気 にかけない。左岸に易貢蔵布へ分水嶺を越える53 00mの峠がある。その峠へ登る道との分岐点を過 ぎたあたりの右岸でキャンプする。馬方は白いテ ントを持参している。午後5時、テント設営。海 抜4220m、早速GPSで位置を測定しソ連地図1: 200,000にプロットする。夜の星空が印象的であ 30

11月 3 日、曇後晴。8:45-1 \mathbb{C} 。一日の天気の変化は大きいが安定はしている。朝の雲は陽光が当たるにしたがい消えて、晴れてくるのが平均

的なパターンである。晴れ間は局所的に西から東 に移動する。夕方になると時雨れることもある。 朝から快晴の日は二回だけだった。 9 時半、キャ ンプ地を出発する。晴れてくる。谷をのんびり上っ て行く。12時、隊商の幕営地で昼食。馬方たちは 焚火をし茶を淹れる。少し塩の入った茶をもらっ て飲む。プンカで焼いてもらったチベットパンは シンプルで飽きがこない。甘いビスケットよりい い。この海抜4400mの隊商の幕営地は牧草地のな かにあり、いい環境だが不燃ゴミの散乱がひどい。 年々増えていったらどうなるのだろうか。暗澹た る気持ちになる。

少し行くと左岸の懸谷の奥にカンガリューという重量感のある6000m峰が現れる。谷はやがて二股になる。4500mのドウチェンモという地名である。道は北に上る。途中で東に最高峰のネナンを遠望する。400mmレンズで記録のために撮る。魅力的な山容である。午後4時、4700mの地点に設営。翌日の峠越えに備える。幸い少し頭が重いていどで、高山病の影響はは殆どない。すでに高度順化できたのだろう。夜は冷え込む。月光に雪山が異様に冴える。満天の星が明日の天気を約束して欲しい。が。夜中に風が出てきた。

11月4日、曇後雪後晴。8:00 0℃。早朝の風 が妙に冷たい。吹雪になる。天候の急変に驚く。 8時半に馬方のリーダー、シャル・ドジとガイド の玉拉が雪の降りしきるなかを先に出発する。彼 らは馬を飛ばして一日で嘉黎に行き、ラサから帰 りの車を呼ぶためである。峠越えの時の天候が心 配である。今まで好天が続いたのに、ハイライト である分水嶺の峠越えの際になぜ天気が悪くなる のか、キャンプを撤収し、不運をかこちながら暫 く様子を見ていると雪が小降りになり青空が見え てくる。10時に出発。小雪のなか峠への登りにか かる。急なところは馬に乗れない。馬に乗ったり 下りたりを三度繰りかえす。息が切れるが体調は よい。マイペースでゆっくり登る。ところが、馬 方たちのほうが頭痛を訴える。永井さんがダイア モックスを三人の馬方に与える。空模様は怪しい が好転の兆しは見える。12時45分にケン・ラに着 く。50cmほどの雪がある。峠の北、数条の氷河を 擁する6130mの岩の城砦、ネパの全容が正面に聳

▼扎拉村で収穫にいそしむチベット族



え雲が去来する。東の方角に6203m無名峰、猛禽の嘴のような氷雪のピークが雲間に姿を見せる。 張少宏が歓声を上げる。

キングドン・ウォードはこの峠をトゥラスム・キエ・ラ(Trasum Kye La)、 $5180 \, \mathrm{m}$ と記録しているが、馬方の発音は私にはどうしてもケン・ラと聞こえた。海抜は、三人の高度計はそれぞれ $5200 - 5250 \, \mathrm{e}$ 指していたので、私の記録には $5200 \, \mathrm{m}$ とした。ここでウオードは地理的観察の上で大きな間違いをしている。この峠の山稜がサルウィン(怒江)との分水界としているが、正しくはヤルン・ツァンポーの二支流の分水嶺である。北側が易貢蔵布である。ウォードが八月に来たとき、峠の近くで青いケシの花のなかでも代表的なメコノプシス・ホリドゥラをたくさん見ているのは興味深い。

最近ケン・ラを越えたのは去年(2000年)の八月に無許可で嘉黎からプンカに抜けた西欧人二人と前述のドイツ人だけらしい。とにかく我々は念願の峠越えを無事に果たせることを永井さんと喜びあう。後は嘉黎まで下り一方である。一時間ほど峠にいた後、馬を追って雪の斜面を駆け下りる。

■旧街道を嘉黎へ

峠から北西に下り、雪が消えた草地(4800m)で遅い昼食をとる。渓谷から不毛の谷へ、峠の山稜を境にして自然条件は変化し、景観はチベット高原的になる。寒くなる。目のとどく限り潅木も低木もない。地にへばりつく低い潅木だけが僅かに生えているだけだ。プンカの渓谷では燃料は薪だが、峠を越えるとヤクの糞に変わる。ヤクの糞はよく燃えるが、火持ちは悪く火力は弱い。峠は

行政的には工布江達県と嘉黎県の境界である。ヤクの放牧は可能だが不毛な谷をくだる。午後5時、最初の村を過ぎ、5時半に旧街道と合流する。ジャンクションには村落がある。チベット語のできない張少宏と馬方との意志の疎通が上手くできず、キャンプ地を何処にするかでもめる。馬方たちは阿扎措(湖)まで行きたがったが暗くなるので、途中で設営する。海抜4510m。峠の東側と比べるとずっと寒い。午後8時、-5 $\mathbb C$ 。

旧街道は北京から昌都、嘉黎、工布江達を経てラサに通じる昔の幹線道路である。キングドン・ウォードの2年前の1922年に英国人として初めてペレイラ将軍が通っている。1910年には変装して隊商にもぐり込んだ矢島保次郎も通っているはずだし、今から100年前に仏典をもとめてラサを目指した求道僧、能海寛も雲南西北で殺害されなければ、この道をラサに急いだことだろう。能海が残したルート図のスケッチに昌都、嘉黎が記されているので、そのことを暗示している。

11月 5 日、曇後晴。 9:00 -1 $\mathbb C$ 。朝方小雪がちらついていたが、青空がでてくる。西にくるほど夜明けが遅い。7時半頃、ようやく明るくなると対岸の村からヤクの群が放牧のため移動を始める。この谷はヤクが多い。 9 時半にキャンプ地を出発する。馬に乗って行くが、谷全体に陽が当たらないのでひどく寒い。身体が硬直する。11時に阿扎措の南岸に着く。この辺りまで車が入ってくる。周囲には樹木は全くない。湖は長さ5.3 km、幅1.3 kmのほぼ長方形をしている。透明度は高いが、不毛な土地の高山湖の風景である。ヤクの隊商とすれちがう。のんびりと湖の南側の道を行き、午後 3 時、橋を渡って嘉黎の街(4460 m)に入る。シャル・ドジと玉扎が出迎えてくれる。招待所に落ちついて四日間のキャラバンを完了する。

馬方たちの労をねぎらって夕食を一緒にする。 四川料理である。好きなだけ飲み食いしてもらう。 またたくまに皿が空になる。ビールをがぶ飲みす る。五人の馬方のうちリーダーともう一人の年配 者を除きあとの若い三人にとっては嘉黎は初めて である。期待したデイスコは嘉黎にはないのでがっ かりしている。初めはしおらしかった馬方たちは だんだん図々しくなってくる。要求がエスカレー トする。翌日嘉黎の北側の峠、バンダ・ラ(5330 m)へ登るための交渉が意外に難航する。一日で往復するのだから馬は2頭、馬方は1人だけ使うというこちらの要求にたいし、馬8頭、馬方5人分全部を払えといって譲らない。最後は馬4頭、馬方4人で決着したが、したたかさを思い知らされる。プンカの家での好印象がいっぺんに瓦解する。チベット族のメンタリティーとして、彼らとの交渉において一旦譲歩すると、更に際限なく要求を上積みしてくる、と探検家バウァーは書いている。同調したい気持ちになる。

11月6日、快晴。8:00-2 ℃。約束より1時遅れて馬がくる。馬方は二日酔いで精気のない顔をしている。10時に出発、街を出ないうちに公安に呼びとめられて、事務所へ行き外人登録をする。正式な一時滞在許可を発給してくれる。公安の連中は親切で、こちらの質問に答えてくれる。嘉黎にくる外国人は年に二組ぐらいらしい。駄目もとで頼んでみたら、公安の二人が途中まで道案内をしてくれることになった。運がよかった。バンダ・ラへの上り口の道がハッキリしないので、案内人がいなけばギブ・アップしただろう。

嘉黎の街をでて易貢蔵布の左岸に沿って下る車 道を馬で行く。旧阿扎村、大きなチョルテンを過 ぎ1時間ほど行くと、旧街道の峠へ上り口にある アサド・ゴンパに着く。みすぼらしい僧院で10人 のラマが住んでいる。公安の人がゴンパの写真撮 影は禁止されていると注意してくれる。6月に来 た時も、ラマ僧から同じことを言われた。ゴンパ の写真を撮るなと言われたの初めての経験である。 その理由は後になって分かった。ゴンパの下で小 休止していると、二日酔いの馬方たちは横になっ てしまい動こうとしない。叱咤して旧街道を登り 始めるが、道がはっきりしない。案内人に先行し てもらい、道を確認しながら登る。30分ほど経っ たところで、道が悪いので馬は登れないと言って 馬方たちは梃子でも動かなくなる。馬ではなく馬 方自身が歩きたくないことは見えみえだが、これ 以上強制するのはやめて、仕方なしに歩いて登る。

キングドン・ウォードがいうほどの厳しい登り ではない。ウォードはバンダ・ラからの眺望は一 見の価値があると書いている。北の彼方に三つの



▲無名峰(6023m)北面(バンダ・ラへの途中から望む)



ジャジャチョ峰(バンダ・ラへの途中から望む) 선 無名峰(6015m)西面。 ▲左、

高い雪峰を遠望しているが、色浦崗日の山塊であろう。また、東の近くに聳える見事なピラミッドの秀峰を見ている。これは我々も見たジャジャチョであろう。ウォードはジャジャチョの山稜をツァンポー・サルウィン分水界の南稜としているが、ケン・ラ同様誤りである。中国の地形図がなかった時代なのでやむを得なかろう。なを、色浦崗日は紛れもなくツァンポー・サルウィン分水嶺を形成している。

上りは歩くと極端にスピードが落ちる。午後1 時、海抜4900mで昼食、ここから南側の6000mを 超える山塊の連なりを展望できる。無風快晴、枯 草の上に横になって瞼を閉じる。至福の時である。 目を覚ますと放牧されているヤクが傍に寄ってき ている。塩が欲しのだろうか。天を突くジャジャ チョ、6447mがひと際素晴らしい。若手の俊英ク ライマーに兆戦させたい山だ。西には阿扎措が冬 を迎えて色彩を失った谷を青く彩る。時間がない ので峠まで行くのは断念する。午後4時、アサド・ ゴンパに戻る。ここから馬に乗るが、突如馬方の 一人が、通りかかったバイクの後ろに飛び乗って 嘉黎に逃げ帰ってしまった。馬が逃げることはよ くあるが、馬方が逃げたのは初めての経験である。 二日酔いのためよほど歩くのが辛かったのだろう。 いずれにしても、大パノラマを満喫できトレッキ ングの締めくくりに相応しい一日であった。

嘉黎の招待所に戻ると、急に客が増えたため、 昌都から来たカンバの商人と相部屋になる。川蔵 北路をヒッチハイクで5日かけてきたと言う。精 悍ないい顔をしている。日本にきたらタフ・ガイ で売り出せるだろう。ヤクの干し肉をかじり、ヤ クの糞のストーブで茶を淹れ、バターは溶かして そのまま呑む。冬虫夏草の買い付けにきて、嘉黎 でビジネス・チャンスを探すらしい。布団をかけ ずにカンバのコートのまま寝る。ゆっくり話しを 聞きたい相手である。馬方たちは二日ほど嘉黎に いて買物をしてプンカに帰る。ラサから迎えのラ ンド・クルーザーが着いた。

■パンチェン・ラマの生地

嘉黎はチベット語で「神山」を意味する。行政 的には嘉黎県は1964年に林芝地区から那曲地区に 編入され今日に至る。面積13,238k㎡、総人口21,0 00人、13の郷、121の村で構成されている。県全体の平均海抜は4400mと非常に高い。地勢的にはチベット北部の高原地帯とチベット東部の高山と峡谷の結合地帯にまたがる。気候的には高原性亜寒帯・半温潤季節風気候区である。嘉黎という村落は地図により異なり、3箇所あるのでややこしい。現在の嘉黎は1988年に新しくできた県の行政・経済の中心である。殺風景で潤いのない新興の街である。それ以前は阿扎村であった。二つ目は、易貢蔵布を35kmほど下った左岸にある旧嘉黎である。前の県の中心であったが、今は寒村である。三つ目はバンダ・ラの北側にあるオールド嘉黎である。これが昔の嘉黎である。三つの嘉黎を線で結ぶとほぼ正三角形になる。

嘉黎がなぜセンシテイブな土地で禁断の地なのか。この土地に古い歴史的な背景があるからではない。パンチェン・ラマの転生にかかわる近年の生々しいドラマに関係しているためである。1995年5月、チベットで六歳になる少年が両親・兄弟ともども中国公安に連れ去られ、消息をたった。この少年は、ダライ・ラマに次ぐ高僧パンチェン・ラマの生まれ変わりとして、インドのダラムサールに本拠を置くチベット亡命政府により認定されていた。事件のポイントを簡単に追ってみよう。1989年:1月28日、パンチェン・ラマ十世タシルンポ僧院で逝去。毒殺の噂が流れる。8月に中国政府はパンチェン・ラマ探索委員会発足。

1995年:5月14日、ダライ・ラマ十四世はゲンドゥン・チューキ・ニマ少年(1989年4月25日に那曲地区嘉黎県で生まれる)をパンチェン・ラマ十一世の転生者と認定したと発表。中国政府は反発、チベット全土で非難集会。17日にニマ少年、両親・兄弟ともに行方不明になる。

11月29日、中国政府はチョカン寺で金瓶掣籤を 行いギャンツェン・ノルブ少年(1990年2月13 日に那曲地区嘉黎県で生まれる)をパンチェン・ ラマ十一世と認定する。

12月8日、タシルンポ僧院で即位式、その後北京に在住。

1996年:5月28日、在ジュネーブ中国国連大使が 「ニマ少年は両親の要請により政府の保護下に ある」と発言。 1999年: 6月、ギャンツェン・ノルブ少年1996年 以降初めてラサ、シガツェ訪問。

2000年:1月、カルマパ十七世がヒマラヤ越えを してインドに亡命。3月、アギャ・リンポチェ 国際宗教自由委員会でパンチェン・ラマ問題も 含め中国政府の宗教政策を批判。

中国政府とチベット亡命政府の狭間で、幼い無 垢の少年が政治に翻弄された悲劇である。ニマ少 年の行方は今でも遥として分からない。

少年は二人とも嘉黎県で生まれた。どこの郷あ るいは村で生まれたのだろうか。私は6月にきた とき、なんどかガイドに訊かせて、ようやくパン ダ・ラを越えた北側のオールド嘉黎に近いところ でそれぞれ生まれたことを知った。少年の確保、 拉致をめぐって現地で両陣営の水面下の激しい暗 闘があったことだろう。公安が厳しく村人の動向 を監視し、緘口令が敷かれたとしてもおかしくな い。ニマ少年と家族が今どこにいるかと訊いても、 誰も応えない。僧院のラマが「公安の許可がなけ れが写真を撮ってはいけない」と言い、また同行 してくれた親切な公安の役人が僧院の写真撮影は できないと言った理由が分かる。外国人の動向に は神経を尖らしている。非開放地区・嘉黎への入 域許可が簡単ではない理由はこんなところにある ようだ。まさにセンシテイブな土地である。しか し、生活の便利さが浸透するにしたがい、時間の 経過とともに忌まわしい記憶は風化していくだろ う。

11月7日、快晴。8:00 -3.5℃。夕べは小学生がチベット語の教科書を持って我々の部屋に教えてもらいにきた。今朝外に出てみると、中学生が路上で本を開いて勉強している。

辺境の町の子供たちは向学心が旺盛である。将来が楽しみである。8時に嘉黎を出発する。運転手の馬さんは奥さんを西安に残し、去年出稼ぎのためラサにきた。チベットの物価は高いが給料も高い。1時間半で世界でも最も標高の高いところにある村の一つであろう夏瑪郷ジャリ村に着く。高度計は海抜4970mを指している。ヤクの放牧だけで生きている村である。屈託のない村人がでてきて写真をとらせてくれる。頼むと娘さんたちが晴れ着姿で現れる。嬉しい交流である。ジャラ村

を辞して二つの5100m前後の峠を越えて 2 時間して、午後 4 時に青蔵公路とのジャンクション (45 80 m) に着く。後は舗装道路を一気に飛ばす。ラサー西寧、ラサー蘭州、ラサー成都の高速長距離バスとすれ違う。 5 年後に完成予定の鉄道建設も始まり槌音が聞こえてくる。チベットは中国の経済システムのなかに完全に組込まれつつあることを実感する。午後 6 時過ぎに当雄 (4330 m) に着いて、天湖賓館に泊まる。 6 月に張少宏が特別に注文したスッポン料理を食べたホテルである。食堂の従業員は四川省出身である。

11月8日、晴後雪後晴。8:30 -3.5℃。観光 地、聖なる湖、納木措を往復して午後5時ラサに 帰還し、20日間の旅を終える。久しぶりにシャワー を浴びる。

11月9日、ラサ市副市長の趙建安氏および中国登山協会副秘書長の張江援氏と夕食をともにし、2002年の計画への支援を依頼する。副市長の趙氏は中国科学院の経済学の教授で、青蔵鉄道の建設を朱鎔基首相に企画・具申した中央のエリート官僚である。3年前に北京から派遣された。ラサ市の経済・文化・スポーツを担当している。中国西蔵登山協会は彼の管轄下にある。2001年の秋には松本で開かれた世界山岳都市会議に出席のため来日している。大事に付き合いたい人である。

11月10日、崗日嘎布山群の拉古氷河に入っていたニュージーランド山岳会 (NZAC) 会長、ジョン・ナンカビスを隊長とするニュージーランド隊にラサで会いたかったが、戻るのは10日後となるというので、帰国の途につく。成都、上海経由乗り継いで、11月12日に我が家の敷居を踏む。年末にこの原稿をタイプしているとき「歓迎するからいつでもまたチベットに来て欲しい」と、趙副市長からE-メールが届いた。2002年も中国辺境通いが続きそうである。

■旅行費用について

日本人が相場を吊り上げ、後ろから来る人たちに迷惑をかけるのではないか、という批判を承知の上で、今回の旅にかかった総費用を公開しご参考に供したい。それぞれの項目の単価も高いが、許可取得の費用が大きな負担であった。 那曲、林芝、昌都の三つの非開放地区を通過し、外国人が

入域困難なセンシティブな土地、嘉黎に入るため一人当たりUS\$2,000、三人でUS\$6,000も支払った。許可をとったトレッキングの通過地点はラサから納木措、那曲、嘉黎、朱熱、八松措、八一鎮、通麦、波密、然鳥、邦達、昌都と広範にわたる。日本人メンバーは中村(67)、永井さん

(69)、春日井さん(68)の三名、ガイドは成都から一名、ラサから一名計二名の隊である。永井さんはいつも一緒に旅をしている横断研究会の仲間、春日井さん(前半のみ参加)は一橋大山岳部の一年先輩である。期間は2001年10月16日-11月13日。

費用の項目	費 用 明 細	金 額	中村	永 井	春日井			
綜合服務費	中村·永井 \$80×2人×24日	\$3,840	\$1,920	\$1,920				
	春日井 \$80×人×16日	\$1,280			\$1,280			
航空運賃他	東京/上海-往復、上海/成都-片道、査証料、				3.00 - 300			
	空港使用料を含む 中村・永井・春日井	\$3,000	\$1,000	\$1,000	\$1,000			
	成都/ラサー往復 中村・永井・春日井	\$1,280	\$ 430	\$ 428	\$ 430			
	成都/上海-片道 中村・永井	\$ 364	\$ 182	\$ 182				
	-do- 春日井	\$ 159						
宿泊費	上海空港ホテル\$50 中村・永井・春日井 2泊	\$ 300	\$ 100	\$100	\$100			
	成都:岷山飯店 \$75 中村·春日井 2泊 永井 3泊	Φ.505	A 4 5 0	A 00#				
	ガ升 3 7日 ラサ:雄巴賓館 \$45-\$50 中村・永井・ガイ	\$ 525	\$ 150	\$ 225	\$150			
	ド 4泊 春日井 5泊	\$ 780	\$ 255	\$ 255	\$ 270			
	八一鎮飯店 中村・永井・春日井・ガイド 1泊	\$ 160	\$ 54	\$ 53	\$ 53			
	錯高-朱熱: \$8 中村・永井・春日井・ガイド	1 7 7 7 7	***	+ 00				
	4 泊	\$ 96	\$ 32	\$32	\$ 32			
	朱熱-嘉黎-当雄:中村・永井・ガイド 4泊	\$ 64	\$ 32	\$ 32	3000			
キャラバン	①結巴/最終キャンプ/結巴 中村・永井・春日井	***************************************	**********					
馬•馬方	馬8頭、馬方4人(単価 \$15/日)×6日	\$1,170	\$ 390	\$742				
	②プンカ/嘉黎 中村・永井	10,000,000,000						
	馬 8 頭、馬方 5 人(単価 \$15/日)×7日							
	&馬4頭、馬方4人×1日	\$1,480	\$743	\$ 41				
	チベット族民家宿泊 4泊(1泊平均250元)	\$ 122	\$ 41	\$41	\$ 40			
車 費 用	ラサ/八松措 2台 延べ1338km(\$0.60/km)	\$ 803	\$ 268	\$ 268	\$ 267			
	三菱車 結巴にて待機 8日間	\$ 480	\$160	\$160	\$160			
	三菱車 朱熱/ラサ 1台 春日井 485km	\$ 291			\$ 291			
	結巴/朱熱 現地手配 650元	\$79	\$ 27	\$ 26	\$ 26			
	朱熱/プンカ 現地手配 1450元	\$177	\$89	\$88				
	ラサ/嘉黎/ラサ1台 1112km 中村・永井	\$ 667	\$ 334	\$ 333				
許可費がイド	非開放地区 那曲 (嘉黎)・林芝・昌都 チベット人ガイド 1名	\$6,000	\$2,000	\$2,000	\$2,000			
584 A-	本人 100元/日 旅遊局 100元/日 20日	\$ 732	\$ 305	\$ 305	\$122			
その他	保険 \$10 中村•永井•春日井	\$ 30	\$10	\$10	\$10			
1 TOOLS 1 TOOLS	納木措入場料	\$13	\$ 7	\$ 6				
	チベット人ガイド・運転手チップ・雑費	\$ 217	\$85	\$ 85	\$ 47			
合 計		\$ 24,121	\$8,610	\$8,683	\$6,828			

単位: USドル。綜合服務費は旅行社の利益を含むオーバーヘッド・チャージ。費用が高くついたのは二つの旅行社を使っていることも原因している。私の長年のエージェントである張兄弟の四川探検旅遊公司を窓口とし、ラサの中国西蔵尼威国際旅行社がチベットでの手配をしているためである。

地域ニュース

《中国》

チョモランマ(8,848m)へ2隊が挑戦

春のシーズンに日本から2隊がチョモランマに 挑戦する。一つは群馬県の桐生山岳会隊(樋口宗 平隊長(64)ら11名)で、ヒマラヤ登山の第一人者 である宮崎勉副隊長(54)、日本女性で最高の八千 メートル峰登頂数4回の吉田文江隊員(46)、医師 である高橋通子隊員(60)ら多才な隊員が顔を揃 えている。又、同隊の別枠で南稜からの登頂者で ある愛知県の石川富康氏(65)も入山する予定。

二隊目は、札幌中央勤労者山岳会隊(佐藤信二隊長(51)ら9名)で3名の女性隊員が含まれている。今春は、この2隊で合わせて8名の女性がチョモランマに入山する。又、南のネパール側からは渡辺玉枝さん(64)も挑戦予定である。

三浦雄一郎氏(69)がチョー・オユーに挑戦

2003年春に古希(70)でのエヴェレスト登頂を目指しているプロスキーヤーの三浦雄一郎氏(69)が今春、チョー・オユー(8,201m)に挑むことになった。昨年には、メラ・ピーク(6,476m)とイムジャ・ツェ(6,186m)に登頂し、コンディション作りを行って来たと云う。三浦氏がエヴェレスト最高令登頂記録を目指すのは、高齢化社会の中で「いつまでも夢を持ち続けそして夢に向かって一歩づつ」と云う人生哲学によるものだと云う。チョー・オユー登山には、加藤幸彦氏(69)も参加する。

Books

遥かなるチベット クーラカンリ

東海大学が2001年春に中国に派遣した登山隊の報告書。登山計画は、チベット大学と合同隊を組み、クーラ・カンリ山群に残されたⅡ峰(7,418 m・登山隊は中央峰と呼称)とⅢ峰(7,381m・登山隊は東峰と呼称)の初登頂を目指すと共に、86年に初登頂されたⅠ峰(7,538m)までの縦走

を試みようというもの。結果的に縦走は成らなかったが、二つの初登頂に成功した。計画の段階から登山の実践に至るまでの経緯が要領よくまとめられており容易に全体を把握する事ができ、今後の登山隊の参考になるだろう。同時に行われたプマョン・ツォの学術調査の結果も報告されている。

(記:山森)

A 4 判 191頁 カラー20頁 2002年 3 月 1 日刊 連絡先: 〒424-0863 清水市船越南町768-43 出利葉義次 **☎** 0543-51-3907

日本人8000m峰登頂者へのアンケート調査

JAC高所登山研究委員会が企画して、アンケートの原案を山本正嘉氏が執筆、委員会メンバーらの意見を参考にして実施した標題のアンケート調査結果について、山本正嘉氏が分析整理したもの。最近ではヒマラヤ登山者向けのアンケートは、HAJがおよそ10年単位で実施したものが目に付く程度であったが、今回は「八千メートル登頂者」(1990年代)に的を絞り、アンケート内容も細かく記述式を多く取り入れた結果、当代ヒマラヤ登山者の考えがかなりの部分で判明した。問題は、本書を読む登山者側の姿勢となるが、良書となるような読み方を期待したいものである。ヒマラヤ登山を目指す人の必読の書。なお、別に『シンポジウム[高所登山の魅力とは何かー二十一世紀に向けて」』が収録されている。(記:山森)

A 4 判 151頁 平成14年 2 月 1 日刊 連絡先: 〒102-0081 東京都千代田区四番町 5 − 4 日本山岳会 ☎03-3261-4433

■財政支援金:10万円(八木原圀明)

─ 東京集会のお知らせ -

日 時 4月22日(月)午後7時~

内容 ヒマラヤ登山50年

場 所 HAJルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分) 又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早 稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前 方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

第23回インド・ヒマラヤ会議報告

HAJ主催による新春恒例のインド・ヒマラヤ会議は、今年23回目となり1月27日(日)東京・ 池袋の勤労福祉会館で行われた。

会議には栃木県や愛知県など全国から2001年実施隊や2002年にインド・ヒマラヤへ出掛ける予定の登山隊関係者など35名の参加をみた。

HAJの山森欣一理事長が開会の挨拶を行い、 関係者の協力で今後もこの会議を継続して開催し て行きたいとの決意が表明された。

会議では、

9時50分~正午「2000年隊登山報告」

練馬山の会のフルーテッド・ピーク(山中八千代氏)、JAC東海のガングスタン(鈴木常夫/水野起巳氏)、長野労山のビハリジョット北峰(坂本昌士氏)についてスライドを交えて報告された。 13時~14時00分「インド登山の実務」

HAJ中川裕常務理事から最近のインド・ヒマラヤ登山の現状やそれに対応するための対策の現状について報告があり、特定の事項については各登山隊の経験者から経験談が披露された。

14時半~16時半「インド・ヒマラヤ登山の変遷」

HAJ尾形好雄常務理事が、東のアルナチャル から西の東部カラコルムまで、スライドをまじえ て国際情勢の変遷とそれに関連して各地域の登山 がどのような変遷を辿ったかを、豊富な経験から 事例を元に詳しく解説した。

これで予定の会議日程を終了し、閉会となった。

インド・ヒマラヤの登山申請

1. 仮登山申請

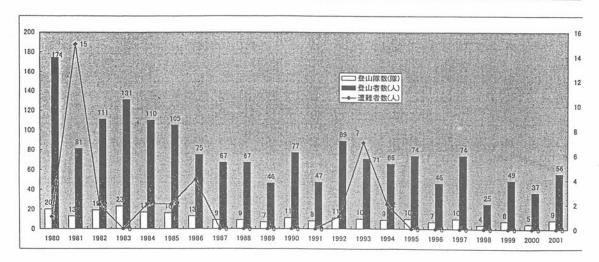
これは希望する山が、希望する時期に空いているかを確認し、空いていれば予約(Booking)をお願いする申請である。IMFは同ルートに登山隊が複数入山する事を許していない。これはネパール、中国、パキスタンなどより登山する側に立った考えである。オープンピークのうちいくつかの有名峰は、人気が高いので早めに申請しないと希望する時期に登山できないことがある。

登山隊は直接インド登山財団(IMF)に申請する事が出来る。この場合の方法も手紙、FAX、E-メールなどの方法から選択する事ができる。

申請書の記入事項は

- ①登山隊名及び国籍
- ②目標の山と標高及び経度と緯度 申請峰が競合する場合もあるので、第2希望ま で記しておくのが望ましい。
- ③経度と緯度を明示したアプローチ図及びルート 概念図。

過去21年間のの日本隊の入山と遭難の推移 ※1994年以降は把握できたもののみ 1996 1997 1998 1999 2000 登山隊数(隊) 248 111 131 110 105 登山者数(人) 174 75 67 67 46 47 29 71 25 49 1678



どの稜、どの壁を登りたいのか明記のこと。様々な地図から転載するのは構わないが、国境未確定エリアについては十分に注意した方がよい。ビザ取得の遅延の原因になる可能性がある。

④遠征期間

- a) インド入国から出国までのおよその日程。
- b) ベースキャンプ到着から撤収までの実質の登山期間。

⑤隊長並びにメンバーリスト

氏名、父親名(死亡の場合も記入)、国籍、現住所、本籍、電話番号、FAX番号、年齢ならびに生年月日、職業、パスポート番号、並びに発行地および取得年月日。最近親者並びに続柄および住所(緊急時の連絡の為)、過去1年以内の訪印の年月日ならびに訪印場所。登山やトレッキングの経験。自衛隊、警察、政府関係の職務についているかどうかなどを記載する。(資料BIO-DATA参照)⑥登山隊の派遣母体名と日本国内の連絡先。

以上を記載した申請書に簡単な願い状を添えて IMFに送付する。だいたい一ヶ月位でIMFから登山許可の内諾書と申請用紙が送られてくる。 尚、これらの手続きは、前述したとおり現在FA XもしくはEメールでも可能である。

昨年(2000年)の状況では、ホームページからの各書式の取得、並びにEメール・FAXでのやり取りはスムーズに進んでいる。

インド登山財団(IMF)連絡先 The Honorary Secretary, Induan Mountaineering Foundation, Benito Juarez Road,

New Delhi 110 021.

INDIA

Phone: 91-11-4671211, 4677935, 4671572,

Fax:91-11-6883412

E-mail:indmount@de12.vsnl.net.in

Indmount@vsnl.com

Web site:http://www.indmount.com

2. 正式登山申請

IMFから送られてきた申請用紙に必要事項を 記入し、申請書、誓約書のそれぞれの個所に隊長 のサインをする。

記入する事項は、仮申請書と同様の事項の他に、 事故などの祭、その処理費用をまかなう各隊員の 6千ドルまでカバーする保険加入に関する証明、 ヴィザを申請、受領するインド大使館、領事館名 の住所ならびにファックス番号。トランシーバー 携行の有無、あるいはIMFからのレンタルを申 し込むかどうか、インド国内のエージェントの利 用。IMFでの宿泊、装備のレンタル、トランス ポートのアレンジなど、IMFへの要請がある場 合には詳細に記すこと。

尚、登山料は従来とことなり、正式登山申請と一緒に送付することになった。内諾書の発効日から2ヶ月以内に登山料が支払われない場合には登山許可が取り消され、他隊から申請が出ている場合には、次の登山隊に許可がまわされてしまうので注意したい。

2001年インド・ヒマラヤ日本隊

	山名	標高	季	隊名/派遣母体	隊長	数	ルート	成果	備考
1	ニルカンタ	6,596	秋	同人ビスタリ	鳴海大助	5	北 面	×	西稜5,550mまで到達。
2	メルー北峰	6,450	夏	松本CMC	馬目弘仁	4	北東ピラー	×	シャークス・フィンから転進、6,050mまで。
3	ビハリジョット北峰	6,290	夏	長野労山	坂本昌士	10	西 稜	0	6/13に初登頂。3日間に7名が登頂。
4	無名峰	6,184	夏	登山技術研究会	森下健七郎	12	南東稜	×	5,750mまで到達。
5	ガングスタン	6,162	夏	JAC東海	鈴木常夫	8	南西稜	0	8/5に3名、7日に3名が登頂。
6	ガングスタン	6,162	夏	JAC東海	水野起己	6	北壁	0	8/5に4名が登頂。
7	ストック・カンリ	6,153	夏	日本大学医学部	小川郁男	9	南西稜	0	8/6に7名が登頂。
8	ストック・カンリ	6,153	夏	どんぐり山の会	永井 豊	5	南西稜	0	8/11に2名、12日に2名が登頂。
9	フルーテッド・ピーク	6,149	夏	練馬山の会	山中八千代	4		0	8/16に3名が登頂。
	C B 14	6,078			磯部恵一	4	東 稜	×	前衛峰5,600mまで到達。

インド・ヒマラヤ2001

	山 名	標高	期間	玉	隊 長	登頂
1	Banderpunch	6102	7Apr-7May	ドイツ	Nicholas Mailaender	
2	Kedar Dome	6830	15Apr-15May	インド		
3	Trisuli West	7035	16Apr-31May	イギリス	Colin Richard Knoweles	
4	Shivling	6543	25Apr-25May	フランス		
5	Meru	6450	25Apr-1Jun	ロシア	Valeri Babanov	
6	Bhagirathi-3	6454	29Apr-12Jun	ドイツ	Walter Holzler	
7	Meru	6450	16Apr-5July	アメリカ	ピート・タケダ	×
8	Kedar Dome	6830	1May-23May	インド		
9	Sudarshan Parbat	6507	1May-30May	インド		
10	Panchachuli	6334	1May-30May	インド		
11	Trisuli West	7035	1May-10Jun	ドイツ	Ralf Messbacher	
12	Chaukamba- I	7138	6May-5Jun	インド	The Control of the Co	
13	Trisul- I & Nanda Ghunti	7120&6390	10May-9Jun	イギリス	Martin.E.Moran	
14	Sudarshan Parbat	6507	10May-10Jun	インド		
15	Jogin-I&Ⅱ&Ⅲ	6465&6342&6116	12May-10Jun	インド		
16	Shivling & Bhagirathi-II	6453&6512	14May-14Jun	ドイツ		
17	Shivling-East Ridge	6543	15May-15Jun	スェーデン		
18	Thelu	6000	15May-15Jun			
19	Satopanth	7075	15May-14Jun	インド		
20	Nanda Ghunti	6390	15May-15Jun	インド		
21	Satopanth	7075	18May-10Jun	チェコ	Pavel Mrazek	
22	Rudugaira	5819	20May-19Jun	インド		
23	Jogin- I & II & III	6465&6342&6116	20May-30Jun			
24	GangotriⅢ	6577	21May-23Jun	インド	Prakash Vishnu Walveker	
25	Kedar Dome	6830	22May-26Jun	オーストラリア		
26	Satopanth	7075	22May-26Jun	ドイツ		
27	Rudugaira	5819	26May-28Jun	インド		
28	Nanda Devi East	7434	1May-21Aug	アメリカ		
29	Leo Pargial	6816	4May-18Aug	イギリス		
30	Nun	7135	1-31July	台湾	Hsin Jung Wu	
31	Bhagirathi-2	6512	1July-30July	インド		
32	Kun East	7077	15July-30July	フランス		
33	Bhagirathi-2	6512	1Jun-23Jun	インド		
34	Manali	5640	1Jun-30Jun	インド		
35	Chaturangi group	6304&6385&6401&6407	1Jun-30Jun	インド		
36	Kalindi	6103	4Jun-24Jun	インド		
37	Manirang-South	5888	3Jun-4Aug	インド		
38	Sri Kailash	6932	15July-15Aug	インド		
39	Kamet	7756	29July-6Sep	ポーランド	Jerzy Tilak	

	山 名	標高	期間	玉	隊 長	登頂
40	Chakura	6529	August	イギリス		
41	Deo Tibba-1	6001	1Aug-30Aug	インド		
42	Bhagirathi-2	6512	1Aug-30Aug	インド		
43	Kangla Tarbo-1&2	6315&6120	1Aug-30Aug	インド		
44	Kun East	7077	1Aug-30Aug	フランス		
45	Kun East	7077	1Aug-30Aug	フランス		
46	Kun East	7077	1Aug-30Aug	フランス		
47	White Sail	6420	5Aug-30Aug	インド		
48	Nun	7135	15Aug-31Aug	フランス	Bacos Miriella	
49	Stok Kangri	6153	15Aug-30Aug	オーストラリア	Michael Chapman	
50	Nanda Devi East to Main(Traverse)		1Aug-31Sep	インド	Near Hajimusafir Khana	
51	Shivling	6543	3Aug-10Sep	インド	Als	
52	Chhamser Kangri&Langaer Kangri	6622&6666	5Aug-3Sep	インド		
53	Kedar Dome	6830	15Aug-14Sep	インド		
54	Kangla Tarbo-1&2	6315&6120	15Aug-15Sep	インド		
55	Bhagirathi-2	6512	15Aug-14Sep	インド		
56	Lampak Main & South	6325&6181	15Aug-15Sep	インド		
57	Kalanag	6387	15Aug-12Sep	インド		
58	Jogin-I&Ⅱ&Ⅲ	6465&6342&6116	17Aug-16Sep	インド		
59	Manda-1 & 2	6511&6568	21Aug-27Sep	韓国		
60	Chomochir & Cerro Kishtwar	6200&6597	18Aug-20Oct	オランダ	Melvin Redukar	
61	Jogin-I&Ⅲ	6465&6116	1Sep-30Sep	インド		
62	Gangotri∭&Rudugaria	6577&5819	1Sep-30Sep	インド		
63	Thelu	6000	1Sep-30Sep	インド		
64	Chandra Parbat	6728	1Sep-30Sep	インド		
65	Bhagirathi-2	6512	2Sep-30Sep	インド		
66	Sri Parbat & Unnamed Peak	6175&6038	8Sep-7Oct	インド		
67	Kedar Dome	6830	11Sep-3Oct	インド		
68	Rataban	6167	12Sep-12Oct	インド		
69	Ladakhi		15Sep-15Oct	インド		
70	Nanda Kot	6861	15Sep-14Oct	インド	Shyamal Sarkar	0
71	Manali & Mukerbeh	5640&6069	20Sep-20Oct	インド		
72	Takpa Shiri	6635	Sep-Nev	インド=英国	Col Balwant Singh Sandhu	
73	Teram Kangri1,2&Singhi Kangri	7151	Sep-Oct	インド	ColD•Kumar & Major Ku	0
				IMF#	ームページより作成	

正式登山申請用紙と一緒に送付するのは以下のとおり。

- a) アプローチおよびルート概念図 (8部)
- b) 日程表 (8部)
- c) 写真を添付したメンバーリスト(8部) (BIO-DATA)
- d) 登山料
- e)環境税(400ドル)
- f) 連絡官用装備貸し出し料(500ドル)
- g) トランシーバー貸出しを望む場合にはレンタ ル料

寸 感

読売新聞3月9日の紙面で前運動部長の迫田泰 敏氏が「8848メートル? 8850メートル? 最高 峰チョモランマ本当の高さはどっちだ」のタイト ルで、昭文社と国際地学協会が出版している世界 地図でチョモランマの高さを8850メートルに書き 換えたことを紹介した。詳細は記事を読んでもら いたいが、新刊の「中国地理紀行4月号」は [世 界最高峰 チョモランマを測る」と題して中国側 の測量の経緯を紹介している。それによれば、こ れまで使用されてきた「8848.13 m」の数値は、 1975年5月27日に山頂に赤い測量標識を立てて山 頂から7~21kmの範囲にある10ヶ所の観測点から データを獲得し得られた「山頂雪面高度8849.05 m」から「積雪深 0.92m」を差し引いて求めた 数値だったという。中国登山協会の協力を得られ なくなって(経済的に)から92年イタリア隊が中 国の設計でスイス製の標識を立て、98年にはアメ リカが75年中国の標識が山頂から20m下に落ちて いると報告。これは面白い。 (山森)

事務局日誌(3月)

- 8日(金) ヒマラヤNo.365号発送
- 15日(金) 桐生山岳会チョモランマ隊壮行会、 於、桐生(山森)
- 18日(月) 元インド登山財団総裁M.Sコーリー 氏歓迎会、於、六本木(山森)
- 21日 (木) ~23日 (土) ニンチン・カンサ隊合 宿、於唐沢岳 (山森他 5 名)
- 25日(月) 東京集会(18名)

ヒマラヤ No.366 (5月号)

平成14年4月10日印刷 14年5月1日発行

発 行 人 山 森 欣 一

編集人山森欣一

発 行 所 日本ヒマラヤ協会

〒170-0013 東京都豊島区東池袋 4 - 2 - 7 萬栄ビル501号

電話 03-3988-8474

郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」

東京新聞の山岳書東京新聞出版局 〒108-8010 東京都港区港南2-3-13

山小屋物語 北アルプス 炉端話 運動生理学百科 さわやかに山 中高年登山 花と歴史の50 記念日の山に登ろう すぐ役立つ Ш Ш すぐ役立つ すぐ役立つ 日本三百名山 の気象と救急法 書散策 の百名水 ・山靴の音 の主人 ılı の花学 |東京新聞の販売店でも取り次ぎいたします。※本体価格に消費税が加算されます 0) ıllı 平易に紹介。 ・事故対策に役立つ救急法を 平易に紹介。 【飛騨高山の花博士】として知られる 60歳から13年間で三百座を踏破した 久島まで、山の百名水を取材。 山岳写真歴30年、北海道 利尻から尾 著者の、山の花見術入門書 山者に炉端で語る一人一話の取って置著名な山小屋の主人たちが宿泊の登 実績を踏まえて、分かりやすくまとめた を歩き、山を楽しみ安全に下りてくるこつを伝授する。 を訪れた珠玉のエッセー集。 ぐる山と人の物語 一致する山はどこに。 そんな時の指針として――「岳人」連載時から好評。 きるのか」を、ヒマラヤなど高所登山 世界的な女性登山家が、初心者とアルプス、ヒマラヤ るよう、中高年登山の虎の巻。 より安全により快適に登山を楽しめ 山の仲間との交遊を綴る。 スーパーお爺さんの山行記 「花と歴史の山旅」の第2弾、花の山々 歴史を刻んできた66軒の山小屋をめ ための一冊。 男達の賦」に加筆、登山をより楽しむ きのお話 どうしたら合理的で安全な登山がで 登山に年齢はない」と主張する著者が 岳人」に3年余り連載した「山人探訪 人それぞれの記念日の日付と標高が つまで数多く発刊された山書。何を読んだらよいか 田部井 桜 排 田 小野木 三郎 兴 工藤 河村 柳原 山本 福島 田 田 柳原 石井 芳野 中 中 博睦 喜 正嘉 正之 光造 治郎 隆雄 淳子 澄江 正明 満彦 修 修 郎 郎 著 著 著 著 著 著 著 著 著 著 1500円 1500円 1500円 1262円 1456円 1359円 1456円 1456円 1553円 1300円 1359円 1456円 2000円 1500円



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約200m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、 高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたを そろって力強くサポートします。

- ●ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ/総重量6.7kg)
- ●パルスオキシメーター (血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店: 日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先 : 株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場 2-5-7 ΚΗビル 7階 TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510 (隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・ 重かなる高みへ (大阪) 206(6362)6060(直通)

トレッキング・海外登山・シルクロード・秘境旅行のバイオニア ■本

社/〒101-0051

東京都千代田区神田神保町2-3-1 岩波書店アネックス 5F

☎03(3237)1391(代) FAX 03(3237)1396 ■大阪営業所/〒530-0026 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F **☎06(6367)1391**(代) FAX 06(6367)1966

国土交通大臣登録旅行業第607号·日本旅行業協会正会員 西遊旅行ホームページ (http://www.saiyu.co.jp)

お問い合わせ・お申し込みにフリーダイヤル 100120-811395 (通話料無料) をご利用下さい。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- ●登山本店/〒169-0073 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03-3208-6601
- ●新宿西口店/〒160-0023 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03-3346-0301
- ●神田登山店/〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-6-1(タキイビル2F) ☎03-3295-0622 ●神田本館/〒101-0051 東京都千代田区神田小川町3-10 ☎03-3295-3215
- ●八王子店/〒192-0081 東京都八王子市横山町 3-12 ☎0426-46-5211
- ●大宮店/〒330-0802 埼玉県さいたま市宮町1-37 ☎048-641-5707
- 高崎店/〒370-0831 群馬県高崎市新町5-3 ☎027-327-2397
 ●川越店/〒350-0045 埼玉県川越市南通町14-4 ☎0492-26-6751
- ●用越店/〒350-0045 埼玉県川越市南通町14-4 20492-26-6751 ●甲府店/〒400-0814 山梨県甲府市上阿原町481-1 2055-221-0141
- ●宇都宮今泉店/〒321-0962 栃木県宇都宮市今泉町1560 ☎028-639-9650
- ●太田高林店/〒373-0825 群馬県太田市高林東町1386 ☎0276-38-0620
- ●松本店/〒390-0874 長野県松本市大手 3 4 24 ☎0263 36 3039
- ●長野店/〒380-0825 長野県長野市末広町1356 ☎026-229-7739 ●新潟店/〒950-0087 新潟県新潟市東大通 2-5-1 ☎025-243-6330

- ●新潟とやの店/〒950-0982 新潟県新潟市堀之内南 1-16-52 ☎025-241-5134
- ●仙台店/〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡 4 1 8 ☎022-297-2442
- ●秋田広小路店/〒010-0001 秋田県秋田市中通1-4-5 ☎018-884-1771
- ●盛岡大通店/〒020-0022 岩手県盛岡市大通 1 -10-16 ☎019-626-2122
- ●札幌店/〒060-0062 北海道札幌市中央区南二条西4-8 ☎011-222-3535
- ●北十二条店/〒001-0012 北海道札幌市北区北十二条西 3-5 ☎011-747-3062
- ●伏古店/〒007-0861 北海道札幌市東区伏古一条 4 1 45 ☎011-787-0233
- ●平岡店/〒004-0874 北海道札幌市清田区平岡四条 1-43-9 **☎**011-883-4477
- ●平岡店/〒004-0814 北海道札幌市宿田区平岡四条 1 -43- 9 ☎011-883-4477 ●外商部(メールオーダー係)/〒169-0073 東京都新宿区百人町 2 - 2 - 3 ☎03-3200-7219



事 務 所/〒169-0073 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004